

メディアとしての玉川学園 ―印刷物と空間の間で教育が展開する―

記念講演 ②

山名 淳

(東京大学大学院情報学環・学際情報学府)

キーワード：雑誌『アイデア』、物語、メディア、学園空間、労作教育

山名：ただ今ご紹介にあずかりました山名淳と申します。どうぞよろしくお願ひいたします。このたび、アイデア書院設立 100 周年ならびに児童百科辞典刊行 90 周年を迎えられましたことを、心よりお喜び申し上げます。このような機会に記念講演の機会をお与えくださいましたことに、まずは心よりお礼を申し上げますと思います。

「書物の海へ ― アイデアとメディア ―」という講演会のタイトル自体から、既に大きなインスピレーションを与えていただきました。本日、「メディアとしての玉川学園 ― 印刷物と空間の間で教育が展開する ―」と題しましてお話しをさせていただきたいと思ひます。今回、玉川学園に関わるメディアを雑誌『アイデア』にまでさかのぼって眺め直す機会を得ました。私自身にとって新たな発見もありました。玉川学園関係者の皆さまをはじめとして、私よりもはるかにご事情に詳しい方々もお集まりのことであると思ひます。私の勝手な思い込みや誤りなどがあれば、ぜひご批正くださいますようお願いいたします。

自己紹介をさせていただきたいのですが、2 つのことをちょっとお話しさせてください。私はドイツ新教育運動研究、とりわけ田園教育舎の考察をしてまいりました。その延長線上で、小原國芳先生、ここでは小原氏と呼称させていただきたいのですが、小原氏の思想と実践に関心がおのずと向いて拙論を執筆したことがございます。その後 2021 年に、玉川大学で開催されました全人教育提唱 100 年記念シンポジウムに登壇させていただきました。本日はそのご縁でこのような機会を授かったものと理解しております。

自己紹介の 2 番目なのですが、私は現在、記憶と想起をキーワードにして教育や人間形成に関する事象を考察することを構想しております。今スクリーンにごらんいただいているのは、そのモデルなのですけれども、その際に鍵となりますのは、人々の間で紡がれる

集合的記憶のあり方と想起文化、つまり記憶のメディアです。今日さまざまな分野と多様な観点から、集合的記憶のあり方に関心が持たれています。集合的記憶は人々のアイデンティティーや協働性を高めることもあれば、図らずも他者との間に境界線を引くことを助長して、暴力を喚起してしまうこともあります。例えば戦争時に極めて意図的に集合的記憶が操作されやすいということは、私たちが残念ながら今日目の当たりにはしているとおりです。集合的記憶に関する学際的な一連の研究は、一般にメモリー・スタディーズと呼ばれています。私はメモリー・スタディーズを基盤として教育に関する議論が展開できるのではないかと考えて、それをメモリー・ペダゴジーもしくは記憶の教育学と称して構想しているところです。この数年間、そのような方向で著作や論文の執筆、あるいは翻訳を行ってまいりました。

本講演会「書物の海へ」は、以上で述べた私の 2 つの研究関心が交錯する部分に位置しているように思われます。本講演では、玉川学園の歴史の一部をメディアの観点から眺めてみたいと思ひます。一方で、田園教育舎系の学校とも言えそうな玉川学園に注目するという意味で、私の新教育研究活動にも関わります。他方で、考察の中心に位置するのは玉川学園の創始者である小原氏が中心となって編集した雑誌『アイデア』です。この点が私の第 2 の研究関心、つまりメモリー・ペダゴジーに関わってきます。本講演では、記憶自体をキーワードとして用いるわけではありませんが、記憶研究にとって重要な 2 つの鍵概念を用いることになります。

1 つ目は物語です。本講演の第一の前提は、学校共同体の形成が集合的な物語を必要とするというものです。その際の物語というのはナラティブであって、ストーリーではありません。つまり、ナラティブとは初めから明確で固定的なプロットがそこにあるようなも

のではなくて、言葉がそれを紡ぐ人の行動とともに動きながら編み出されていくダイナミックな過程でもあります。皆さんがワールドカップのサッカーのゲームを観ていらっしゃるかどうかわかりませんが、私は比較的に熱心に観戦しております。サッカーゲームの場合、監督の当初のプランどおりにならず、めくるめく展開の中で個々のプレイがその跡を残していきます。そのような力動性がナラティブと似ていると私は感じます。

このことと関連して本講演で確認したいのは、玉川学園において学校共同体の物語がどのようなものであって、それはいかんにして生み出されたのかということです。学校の現状と未来を物語る方法はさまざまにあります。例えば、数値目標を示して学校や教育の未来を展望することもできることは、私が言うまでもありません。小原氏の場合はどうでしょうか。少なくとも外部へと発信する印刷メディアにおいて、それとはまったく異なる肌触りの言葉の用い方をされました。後で述べることとなりますが、単純化のそしりを恐れず言えば、特にその起点としての雑誌『アイデア』は、いわばインターネットなき時代の SNS 的な媒体としての役割を果たしていたように私には思われます。

本講演におけるもう 1 つの鍵概念はメディアです。一般にメディアと言えば、印刷物などをプロトタイプとする情報の媒体を意味します。本講演ではそのような意味でもメディアという語を用いることにしたいと思います。けれども、ここではそれよりもやや広い意味でメディア概念を捉えることとなります。メディア論の代表的な人物の一人であるマーシャル・マクルーハンが述べるとおり、広い意味のメディアを人間の身体の拡張と捉えるならば、紙媒体のメディアも含めて多くのものがメディアと見なされます。テレビやコンピューターは言うまでもなく、私たちがかけている眼鏡や運動靴、エアコンや自動車さらには都市構造そのものもまた、彼ならばメディアと呼ぶでしょう。つまり、あらゆる文化的な産物は皆メディアとしての側面を有しているということとなります。

本講演では、何でもかんでもメディアというところまでは視野を広げることはありません。ただし玉川学園の歴史を考える時、空間構造が重要なメディアとして浮上してくることは強調したいと思います。本講演における第二の前提は、学校共同体では物語に対応する空間が形成されるというものです。これに付随するのは、それでは玉川学園における空間メディアの特徴は何かという問いです。ここでは、雑誌『アイデア』に

よって醸成された学校共同体の物語に対応する具体的な空間としての玉川学園が出来上がっていく過程の一端を、『アイデア』の後継誌ともいえる『学園日記』の読み解きによって紹介したいと思います。その時に私たちが確認することになるのは、玉川学園が学校共同体の物語の具体というだけではなく、その空間自体が物語を醸成していくメディアとなるということでしょう。

最終的に私たちの脳裏に浮かび上がるのは、学校共同体の印刷メディアと空間メディアの「あいだ」で教育が駆動するというイメージです。第 3 の、そして最後の問いは、玉川学園ではどのような教育が行われたのかということです。端的に結論を述べることをお許しいただけるのなら、それは労作が物語と空間をつなぎ教育活動を生むということ、またそこに新たな物語が生み出され、共同体の文化的記憶が沈殿していくということになるように思います。

本講演の構成はスクリーン上にござらんいただいております。今まで述べたことは、私が主導してコンセプトを述べてきましたが、ここからの主役は私というよりはむしろ小原氏の声と言葉です。私が重要と思ったものを取り上げましたが、森先生が取り上げられたことと結構一緒だったりして、重要だと思うものは皆一緒なんだと感じたりもします。ただし、視点が若干異なると思いますので、私はこう思うということをつけ加えてまいります。その次にお話しさせていただくのは印刷メディアについて、またその後で空間のメディア、つまり玉川学園について、そして最後に情報と身体というテーマのもとに一言だけコメントをさせていただきたいと思います。それではさっそく印刷メディアのほうに入ります。

1923 年、大正 12 年、小原氏はアイデア書院を立ち上げて、本格的に出版・印刷事業に携わることを開始していきます。雑誌『アイデア』には、アイデア書院から刊行された著作や雑誌の広告が掲載されています。今皆さんに見ていただいているスライドの右側には、そうした広告の一部を提示しております。雑誌の刊行を重ねるごとに広告の分量は増しており、そのことによってアイデア書院が精力的に出版活動が続けていたことが既に推し量られます。森先生の講演で私が学んだことは、7 年の間に 200 もの書物を出版されたという驚くべき事実でした。アイデア書院から玉川大学出版部へと移行してからの活動も含めると、小原氏が関わった出版物は膨大なものになると思います。

ここで皆さまに問うてみたいのは、ここまでメディ

アの発信に積極的であった新教育の実践家が果たして他にいたのだろうかということです。管見の限り、海外も含めて、小原氏に比肩するような新教育の実践家は私には思い当たりません。新教育実践家としての活動を費やす労力だけでも既に相当なものであったでしょうし、また後でも述べますが、小原氏は全国でも当時最も多くの講演を行っていた教育者の一人でもありました。それに加えてこの出版・印刷事業です。『アイデア』を眺めてみると、出版にかけた小原氏の情熱と労力がいかに大きなものであったかがよく分かります。同時に教育者として、教育論者として、また出版事業者として、今で言うところのエフォートの総計が一体どれほど膨大なものであったかが、にわかには私には想像できないというのが本音です。

ともかく雑誌『アイデア』は、学校共同体の集合的記憶と関わる物語が紡がれていく最初の重要な情報の舞台となっていきました。『アイデア』は小原氏の出版活動の旗印的な役割を果たした雑誌で、1923年から29年まで刊行が続き、小原氏はそれ以前に出版活動を行っていましたが、そこからアイデア書院への飛翔（ひしょう）について、氏の自伝的著作の中で次のように記しております。「私は〔成城小学校に〕着任して間もない大正九年四月、日本教育の根本改造を旨として『教育問題研究会』を発足させ、その機関誌として『教育問題研究』という雑誌を刊行。……。出版事業もその延長。大正十二年には『アイデア書院』を設立…」。

雑誌『アイデア』を創刊号から最終号まで瞥見（べっけん）してみると、その媒体は少なくとも3つの機能を果たしていたと思われます。端的には、第1に小原氏の教育理念を醸成する機能、第2に教育と教養に関する情報発信の機能、そして3番目に全国的な教育改革を目指すSNS的な機能です。その1つずつを順に追ってみたいと思います。

第1に教育理念の醸成と共有の機能です。創刊号の冒頭に「アイデアに——一年頭（はじめ）の祈り」と題した小原氏の詩が掲載されております。そこでは小原氏はアイデアがギリシャ語で理想を意味するとした上で、次のようにうたっています。「みながお前をシッカリ理解する時が来て欲しいのだ。／早く」。雑誌『アイデア』そのものが小原氏の掲げる教育のアイデア探求の道のりであると同時に、その道程を情報として読者と共有することによって、教育理念のナラティブを織り上げる媒体であったと言うことができます。ちなみに『アイデア』のみならず、アイデア書院において『学校劇論』

をはじめとする小原氏自身の教育論を世に問う多くの著作が刊行されておりました。そうした著作の刊行も教育のアイデア追求の一環であったということが言えそうです。

ちなみに、これは私自身の独り言として聞いていただきたいのですが、アイデアの邦訳を小原氏はどのように考えていたのかはご本人に尋ねてみたいところです。よく知られるとおり、小原氏は「ホント」という言葉を頻繁に用いておりました。例えば「ホントの教育」などです。ひょっとしたら「ホント」とは、小原氏にとってアイデアの日本語訳として意識的に使われていたのではなかったかということが思い浮かびました。私の妄想かもしれませんが、どなたかご存じの方がいらっしゃいましたらご教示いただければ幸いです。

雑誌『アイデア』の第2の機能は、教育情報誌としての側面にあります。創刊号において、『アイデア』が「生まれましたわけ」という文章が掲載されております。そこでは以下のように記されております。「忙しい生活をしてる御互（おご）にはコンデンスしたエツキス丈（だ）けを知ることも必要と思ひます」。あるいは「主として芸術、宗教、哲学、教育等に関する論説やら感想やら経験談をのせます」。また第2号では「真に精神的に文化的に有意義な本」を出版することで、日本の教育文化振興への寄与が目的として掲げられています。現代であればあらゆる情報がインターネットを通じて瞬時に伝わるわけですが、20世紀の前半には当然そのような状況にはありませんでした。また、都市部と地方では情報の格差が大きく生じていたことでしょう。そうした中で、子どもたちの教養に関する有意義な情報を雑誌『アイデア』を通じて広く伝えていこうという小原氏の熱意が伝わってまいります。

全国の学校教育を活性化しようという試みは、一方通行的な情報の提供だけにとどまりませんでした。小原氏は雑誌『アイデア』を通じて学校教育の改革を促し、またその反応を受け止める仕組みを作り出そうとしておりました。小原氏の理想として描かれていたのは双方向的なやりとり、つまりある種のソーシャルネットワークであったことが分かります。その典型として思われるのが「児童図書室論」です。創刊号における最初の論考として小原氏が掲載したものがまさに「児童図書室論」でした。その後、複数の地方の学校から児童図書室の建設が依頼されたといいます。第20号には、児童図書室の建設のために「十円なり百円なり纏めてお送り下されば責任もて選択します」と記されております。つまりアイデア書院は、各地の児童図書に収め

られる書籍をプロデュースすることを行っていたようです。単に情報を発信したにとどまらないということです。

そのことと連動して興味深いのは、アイデア書院が「児童文学研究会」を立ち上げて『児童文学』の刊行を行っていたことです。第8号の編集後記では、つまり『アイデア』の創刊号が出てから約8カ月後には既に「児童文学は……いよいよ十萬部を発行することになりました」と記されています。これまた私の独り言となりますが、この児童図書室建設運動がどのような広がりをもったかは知りたいところです。残念ながら雑誌『アイデア』を眺めるだけではそのあたりのことはよく分かりませんでした。玉川学園にご縁のある方々で、もしどなたかご存じの方がいらっしゃいましたら教えていただければ幸いです。

ちなみに全国の学校教育活動活性化は、児童文学に関することだけにとどまりませんでした。このあたりは森先生のお話とほぼ重なりますので省略させていただこうと思いますが、一つだけ申し上げたいのは、学校劇を推進したというところにおいて、先ほども申し上げましたように、『学校劇論』という著作を1923年に小原氏はアイデア書院から出版したということです。この本は学校劇に関する有力な情報発信の媒体となりましたが、そこにとどまることなく、小原氏は雑誌『アイデア』の中で学校劇の懸賞募集を行っていました。募集広告には次のように書かれていました。「一等入選に対しては、其道の大家」に委嘱して「作曲を附して出版いたします」と。この大家とは梁田貞という方で、私は不勉強で存じ上げず、どんな方だろうとちょっとインターネット検索してみました。皆さん「どんぐりころころ」をご存じだと思いますが、この歌を作曲した方だそうです。梁田氏と小原氏は接点があって、その方に作曲をしていただけたということが学校劇の推進につながっていくという、この仕掛け自体がとても大掛かりだと私はびっくりしました。

さらに言うと、当時有名だった小山内薫という劇作家がいるんですけども、この小山内氏が『学校劇論』を読んでとても感激して、そして小原氏に書簡を送っております。その書簡が『アイデア』誌に掲載されています。そのあたりのことも非常に興味深く思われました。森先生のお話にありましたように、さらに音楽に関するアドバイスや、あるいはプロデュースも行っていたことがこの『アイデア』から分かります。

ここで1つエピソードについて触れさせていただきたいと思います。雑誌『アイデア』を眺めていた私にと

って最も大きなインパクトがあったことは、この雑誌が創刊された1923年に小原氏とアイデア書院がとても大きな試練に直面していたということでした。つまり同年9月1日、関東大震災が発生してしまいます。『アイデア』創刊からわずか数カ月後、巨大地震が起こったということです。小原氏は『アイデア』の第9号を「大震災記念号」と銘打って、血が噴き出るような筆致で当時の様子を描写しています。その1行目は次のように始められております。「渾沌、悲惨、悽愴、酸鼻、荒寥、失望、怒、破壊、狂奔、空、無、戦ひ……あらゆる一切の形容詞を以てせざれば蓋し能はざる大混乱の東京に化した」。小原氏は、東京中心の惨状を目の当たりにしました。次のようにつぶつてありました。「九段の坂の上に立って見おろせば、ありしひの壯麗は如何に。神田の繁華もただ焼けくすぶつたこけらになっている。……。実にミゼラブルそのものである。悽愴そのものである。さらに／累々たる死骸！……。その後、克明な描写が続きますが省略します。こうした状況は、アイデア書院にも甚大な被害をもたらしました。第9号の編集後記は次のように伝えてあります。「神田においてありましたストックが焼けました。小一万の損害はありませう。小原も集成社で出した紙型が大抵焼けて、さっそく私共の生活問題ですが、でも強い強い魂が興（あたえ）へられました。『愈々（いよいよ）戦だ』と國芳は申します」。あるいは次のようにも書かれていました。「地震で五百万余の活字がひつくりかへりまして、印刷部の整理が中々で、こんなに醜くなりました。お許し下さい」。そうした大惨事を乗り越えて、ともかくもアイデア書院は事業を継続していくことになります。特に大震災発生からの1年間は、多くの方々に助けられながら運営が行われたこと、またそうした支援への感謝の気持ちがつぶられております。ちなみに後でまた改めて述べることとなりますが、小原氏は大惨事にもかかわらず、あるいはまさにそれ故に、教育改革への意志をさらに強めていくことになります。

エピソードの2番目です。ここでお話ししたいのは、私個人が地方で偶然体験した小原氏の影響についてです。鳥取県の中部にはその地域の新教育運動をけん引していたことで有名な倉吉市立成徳小学校という学校があります。私は数年前にこの学校の歴史について調べておりました。この学校では、東京から当時とても著名なダンサー石井猷氏の舞踊団を招くなどして、積極的に学校演劇を推進しておりました。今、スクリーン上の写真に見いただいておりますとおり、今日の私たちの目から見ても極めて芸術性が高いと評価され

る子どもたちのパフォーマンスでが舞台上で展開されていたことに、私は驚きました。注目したいのは、そこに小原氏の影響があった可能性があるということです。

同校には明治期以来、職員図書と称する教員用の著作を集めたコーナーがありました。そこには数多くの新教育関係の図書と並んで、小原氏の『学校劇論』が収められておりました。残念ながら、この小学校の資料には小原氏からの直接の影響について言及した文章は残されておられません。けれども、小原氏の『学校劇論』が大正期には既にこの学校の職員図書として読まれていたこと、さらに小原氏とも実は関連のあった石井猷氏の舞踊団が同小学校を訪問していたことは、そのこと自体がとても興味深く思われます。アイデア書院やそこでの小原氏の活動が、遠く離れた山陰地方にも影響を与えていた可能性を示唆する興味深い事例として紹介させていただきました。

さて、空間メディアのほうに移ります。雑誌『アイデア』の創刊から7年目、小原氏は自らの教育のアイデア、すなわち教育の理想の形をつかんで具体的な教育空間の形成へと向かいます。そのための大きな動因となったのは、あの関東大震災であったと述懐されています。既に『アイデア』の大震災特集号において、小原氏は大惨事の中でなおざりにされた「ウヨウヨ」と「毎日遊んで居る」子どもたちを憂い、次のように述べています。大惨事後の状況を目の当たりにして、小原氏は「子供が忘れられた！／教育が忘れられた！／三十年先、五十年先、この大東京をホントに成就し、完成する大事の子供が忘れられた」。

小原氏は自伝的著作においても、この当時の心持ちについて次のように述べておられます。「新教育の夢は、ますますふくらむ。……。小学校、中学校、高等学校と、理想の一貫教育を、ぜひ実現したい。そういう夢がふくらんだところへ、大正十二年の関東大震災。……。／子供たちの安全のためにも、理想の学園造りのためにも、郊外へ移らなければならない。私は、武蔵野の森の中に、大きな総合学園を建設することを夢みました」。その武蔵野の森というのは言うまでもなく、今私たちがいるこの場所であること思う時、ある種の感慨を覚えずにはいられないのは、おそらく私だけではないと思います。

さて1929年4月、理想の教育空間としての玉川学園が開校します。印刷メディアのほうに注目してみると、その前後の時期は『アイデア』とその後継誌ともい

える『学園日記』が同時に発刊されていた珍しい時期でした。同年10月、『アイデア』の最終号となった第79号が刊行されます。そこに掲載されている小原氏の「アイデア書院と玉川学園出版部との合体」という記事は、当時の氏の心情を吐露するものでした。小原氏は一方で、「アイデア書院がいよいよ、本来の目的でありました『教育王国建設への奉仕』を徹底的に果たすべき秋が来ました。過去七ヶ年の長い苦闘でした」と述べて、自らの教育計画が具体的な空間メディアへのステージに入ったことへの意気込みを示しています。他方で、印刷メディアについては両媒体を維持することの困難さが示されています。小原氏は、「この種の先駆であった『アイデア』の廃刊に「耐へられぬ悲しみを感じ」つつも、「毎月二つづゝを生み出しますことは、とてもまた耐へられぬ生みの苦しみ」であると心情を吐露しています。

『学園日記』は雑誌『アイデア』の基本的な特徴を継承しつつも、学校通信的な側面を強化していると私には見えました。この時期に入ると、小原氏の活動において情報の世界との連なりは継続して重視されていきますが、同時に今や身体を用いた労作という具体的な活動がその中心を占めるようになります。『学園日記』が途中で『学園日記労作教育研究』と名称変更されたことは示唆的です。『学園日記』は学園空間が形成される過程を記録し、読者と共有するための媒体となりました。またそのことによって、『学園日記』は小原氏の教育理念と実際を伝達する機能を兼ね備えることになりました。ここで一つのテーゼとして強調してあえて言うならば、学園という具体的な活動の拠点が出来上がったことによって、情報世界と私たちの身体を持つこの物理世界の間で、本格的な活動の往還が生じ始めたと言っているのではないかと思います。

玉川学園の空間は『アイデア』時代に醸成されていった教育の理想の具体的な対応物としての側面を有しています。後でまた見ることになりますが、第1の特徴は何よりも自然環境を重視しているということ、そして第2に、隅切りという手法に象徴される人間の生活を重視した環境形成が志向されていることにあります。そのような小原氏の方針は既に1929年の『学園日記』の創刊号の表紙に予示されていると言うことができるかもしれません。今、皆さまにスクリーンに見ていただいているのがその表紙となります。その中央に描かれている意匠、皆さま、これは何だと思われるでしょうか。少し拡大してみます。これです【と述べて表紙をスクリーンに提示】。

ユーゲントシュティルを思わせる生命力あふれる版面をじっくり鑑賞してみますと、生まれたばかりの人間が草花に抱かれている様子であるように私には見えます。赤ん坊のように見えるその人間は、天空に向かって懸命の力で思い切り手を伸ばしています。その下には必ずしも読みやすいとは言えない芸術的な書体で、何やら文字が書かれています。よく見ると、ドイツ語で“Neues Leben”と記されています。つまり「新しい生活」と書かれています。Leben は英語の life と同様に、生活であり人生であり、また生命を意味する多様な言葉です。Leben の頭文字の L の字ですが、その上部はハート形をあしらっているようにも見えます。

生まれたばかりの生命を自然環境が優しく包み、その人生を見守っている。バラのように見える草花がリングを成して、その生命の息吹を祝福しているかのようです。やがてこの生命は自然に守られながら自らの生活をとおして成長し、その世界を開拓して、今度は自分自身が他の人々を支えるようになります。そのシンボルがそのような意味を帯びているとすれば、“Neues Leben”は生まれたての新しい生命でもあり、その子が歩む新しい人生でもある。また、そうした人間の歩みをとおして生み出される「新しい生活」であるかもしれません。生命を包み込む環境というコンセプトが、既にこの意匠のうちに凝縮しているように思われませんか。

小原氏が抱いた子どもたちの理想郷は、通常の学校の観念をはるかに超えた壮大なものでした。注目したのは第1号の裏表紙です。そこには「高原の学園都市」と題された広告が掲げられております。「高原の学園都市」といい、「夢の如く美しき文化的芸術的都市」といい、「東京近郊の軽井沢」といい、私が感嘆するのは小原氏の人を動かすことのできるキャッチコピーのセンスです。もとより、小原氏の文章には肉声のエネルギーがこもっているかのように感じるものが多くあります。その特徴がここにも見られます。ともかくです。今、私たちがいるこの場所（＝玉川学園キャンパス）やこの学園都市のあり方、緑を豊かにもつ街というより大きな共同体によって学校共同体が覆われているというこの空間のあり方、これが他ならず小原氏によるアイデアの体現でありました。

小原氏の自伝によれば、そのような空間のイメージは玉川学園が創設される10年以上も前に抱かれたものであったとされています。1918年、小原氏が京都帝国大学を卒業する年の年賀状に、「ゆめの学校」と題して、1,000枚くらいの版画を印刷して送られたことは

よく知られています。自伝には、その版画を小原氏が後年思い起こして描いた絵が掲載されております。手前にある緑が、深い森林の向こうになだらかな丘陵地が広がりを見せ、その中腹に建てられた学校まで緩やかな坂道が続いています。全体がどこか調和的な丸みを帯びた、優しい質感の絵という印象が生じるのではないのでしょうか。

京都の法然院とその左右にある森の茂み、庭園、そして本堂から眺める吉田山から西山一帯が、「ゆめの学校」の原風景であることが自伝には記されております。とりわけ今日の玉川学園の正門から坂道へと至る空間の雰囲気はそのイメージに重なることを小原氏はうれしく思い、「私の芸術作品の一つ」とであると感慨をもって記しています。余談になりますが、小原氏のこの逸話を思い出して、昨年、私は京都の法然院を訪れました。今見ていただいているのがその時に撮影した写真なんですが、この2つを見比べて、皆さんはどのように感じられるのでしょうか。閑静な参道と風流なたたずまいの萱門が印象的なその風景は、確かに小原氏が描いた「ゆめの学校」の雰囲気と重なるものがありました。法然院を後にしてからも、しばらくその余韻に自分自身は浸ることができました。皆さまにも訪問をお勧めしたいお寺のような気がします。

少し脱線しました。軌道修正します。小原氏にとって、自然や田園の要素は学校と街が融合した教育の道場には不可欠でした。玉川学園設立よりも5年前、既に小原氏は雑誌『アイデア』に掲載された「このごろ」と題した随筆の中で次のように書いております。「広い武蔵野、玉川の清流、気持ちのよい高台、雑木林、黄塵の巷から離れて、ノンビリした純潔な大自然、それらはたしかに、私達のいい加減な教育以上の大教育であるにちがひない。

また1930年代半ばにおそらく作られたと思われる『玉川学園分譲地案内』には、次のように書かれておりました。「多摩川を越して、はじめて森林地帯丘陵地帯に入りますので、ホントの郊外、ホントの人間生活の場所といふ気がいたします」。また、そのような自然環境こそが「生活の理想郷、休息と安住の地」であるとも、そのパンフレットには書かれておりました。自然環境がホントの教育や人間生活にとって大切なのだということは、小原氏の著作や論文において何度も強調されております。

今見ていただいている写真[当日、スクリーンに提示]は、玉川学園前近くの風景です。忘れてならないことは、自然環境ばかりではなく、人工的空間に関する

る文化、つまり都市計画も小原氏が重要視していた部分であったということです。私自身が最も感動を覚えた小原氏の都市計画に関わるアイデアは、あの有名な隅切りと呼ばれる道路の形態です。隅切りとは、十字路の四隅を切り落とし、歩行者の見通しを良くした道路の造り方のことを言います。隅切りは既に成城学園の街づくりの際に小原氏によって創案され、玉川田園都市にも導入された空間の工夫でした。小原氏は、この道路の形態を玉川学園にも導入したのです。小原氏自身は次のように述べています。「四ツ角はツブしました。やがて、自動車もドシドシ通ろうし、子供たちが自転車も乗りまわそうし、駆けっこもするだろうし！それを、今、東京都の道路課や新聞社あたりで、文化財として祈念せねばと問題にして下さるのがウレシいことです」。

子ども中心主義の新教育的学校に関心を寄せる時、私たちは往々にして自然空間志向のほうに目を奪われがちですが、こと小原氏の構想においては、街の空間は全否定されるというのではなく、新しい生活の重要な基盤として配慮されるべき何ものかでありました。都市計画の専門家からも、経済原理よりも生活や教育の原理を優先した隅切りのようなアーキテクチャ上の工夫は高く評価されました。

ところで、学園とその周辺における生活と教育活動にとって基本的な空間基盤は、最初の数年間でほぼ整うことになりました。関連資料を概観してみると、中学校校舎や松陰橋など、主立った構築物が最初の3年間で次々と建てられていたことが分かります。キャンパス空間構築の過程は、それ自体大変興味深いのですが、本日はその過程を詳しく追うことは割愛させていただきます。ただし重要であると思われるのは、学園校地の構築活動がそのまま児童・生徒にとって労作の機会、つまり教育の機会になっていたということです。

小原氏は、玉川教育と呼ぶべきさまざまな現実生活の活動の列挙を試みておりますが、その中には例えば測量、開拓、分譲、建築が、つまり空間を構築するという大きな活動がここに含まれていることに注目しておきたいと思います。労作による空間構築への参加は、学園キャンパス内にとどまるものではありませんでした。『学園日記』を眺めてみますと、「道路の開鑿、ドブさらへ、家の周りの植樹、砂利撒布（さんぷ）、村の掃除、便所のこやし汲み、塵芥の焼却」なども、子どもたちの活動に属していたことが分かります。なお、玉川学園における労作の作とは、作業の作ではなく創

作の作であると意味付けられていたことは重要かもしれませんが、そのような意味で労作は、広義には全人教育とほぼ同義のものと見なされておりました。

労作との関わりで言えば、空間構成のみならず、その一帯の生活が子どもたちの労作に支えられていたことが当時の記録に記されております。周辺の新聞配達や牛乳配達、それは子どもたちが担っており、また日用品などを中心に学園村における、当時は学園村と呼ばれていましたが、そこでの各家庭の御用を聞いては仕入れて配達を行っていたことが記されております。労作に関して最後に取り上げたいのは、出版と印刷もまた玉川学園の空間における労作の一環として位置付けられていたということです。学園創設直前、既に小原氏は次のように述べております。『アイデア』からの引用です。「……玉川学園では、特に労作と体験とを主体といたしますので、出版事業も必然、教育材料として加へられねばなりません」。あるいは次のようにも述べられています。「活字作り、活字拾ひ、組み、紙型、印刷」などなど「さては編集、校正、口絵、装幀等の実にさまざまの貴い教育が出版といふ一つの仕事からでも生まれて来ますことを思ひますと、どうしても学園にも出版部を創（はじ）めざるを得ませぬ……」。

私の講演を総括してみます。短くまとめるならば、次のようになるかと思えます。私たちは雑誌『アイデア』を論じることから始め、『学園日記』を経由して玉川学園の創設への道のりの最初の部分までたどってみました。小原氏は情報メディアを駆使しつつ教育の理念を醸成し、その理念に基づいて具体的な教育空間をつくり出していきました。そうした空間形成もまた労作という教育の一形態を促すものとなりました。そこでは認識の領域と密接に関わる身体性を交えたより広い教養の領域が開かれていくことになりました。そうした教育の理念と実践の変容過程が、やはり情報メディアをとおして全国に向けて発信されていきました。そのような情報発信の作業もまた労作教育の一環であったことを、私たちは最後に確認しました。

本日は具体的に取り上げる時間はありませんでしたが、玉川学園の草創期には労作教育の研究会が定期的に催されておりました。玉川学園という具体的な空間が拠点となり、全国から人々が集まって研鑽（さん）し、学びの成果がまた出版メディアを通じて発信されておりました。印刷メディアと空間メディアの双方が関連し合いながら、その間に教育を生み出していく。メディアを鍵として小原氏の足跡をたどり直す時、私の脳裏に浮かび上がったのは、そのような力動的なイ

メージであったのです。

そのようなことを念頭に置いて、現代教育におけるメディアと教育について思いをはせる時、私たちにはどのようなことが言えるでしょうか。おそらくここからは、さまざまなアイデアが浮かび上がると思います。皆さまが自由に発想し得るその可能性を、私がこうであるというふうに限定してしまうことは控えたいと思います。もし小原氏がこの情報化社会にご存命であったならば、一体どのような行動をされていたのだろうかとおのずと想像してみたくもなります。

小原氏が今いらっしゃったならば、雑誌『アイデア』によって実現しようとした教育のいわば手作りのソーシャルネットワーク化は、今日のデジタルテクノロジーを駆使しておそらく効率的になされたことでしょう。しかし同時に、そのことによって実現されるわけではない要素は何かということにも、小原氏は目を向けたのではないかと想像いたします。身体性が大切となる労作的な要素がその一つです。あるいはまた書物ということで、私たちがイメージする手触り感のある、ある種の物が持つ意味について、小原氏なら現代何をコメントされるのか、そんなことも聞いてみたいところではあります。

京都の法然院にインスピレーションを与えられた玉川学園の正門から、このキャンパスの聖山の頂に至るまでの道のりを歩きながら、先ほど述べたようなことをじっくりと考えてみたい、そういうふうに思った1日でした。こう考えてみると、玉川学園というこの空間メディアは今でもなお私たちを揺さぶっている、そういうふうに言えるのではないかと。この言葉をもって、私の講演の締めくくりとさせていただきます。長時間にわたり、ご清聴ありがとうございました。